

さわだ せんざん  
沢田 泉山

教育者

1823(文政6)年～1910(明治43)年

1. 経歴・狭山市とのかかわり

文政6年(1823)11月15日、入間郡北入曾村(狭山市北入曾)の本橋家に吉右衛門の四男として生まれ、幼名を茂吉と言ひ、後に新五郎正勝と称した。「七曲井」(狭山市北入曾 1366)に因み、泉山と号す。天保3年(1832)2月から常泉寺で釈亮賢に漢学を、同8年(1837)2月から田口保明(1804～1892)に国学を、漢文と漢詩を大沼沈山と関口貞斎に学んだ。天保12年(1841)1月から宮野助左衛門に和算を、弘化3年(1846)5月から安政2年(1855)8月まで関口玄益に漢方医学と易学を習得した。農業の傍ら医学を志したが、教えを乞う者が多くなり手習塾を開き、近郷の子女に「読み、書き、そろばん」を教えた。

弘化3年(1846)4月、24歳で入間郡北野村広谷(所沢市小手指南)の沢田家の養子となり同家を継ぐ。安政2年(1855)8月1日、入間郡北野村広谷(所沢市小手指南)に手習塾兼漢学塾「北広堂」を開いた。万延元年(1860)3月、京都青蓮院宮御門流の入木道の免許を受け、元治2年(1865)2月、京都嵯峨御所江戸表御役所から「北広堂」を許され、書道の泉山流を創作する。入間郡や高麗郡、多摩郡、江戸府内、信濃国、越後国から子弟が集り、通学圏は61か村に及ぶ。才能ある者は内弟子として寄宿させた。明治5年8月2日(1872年9月4日)、学制が公布されると熊谷県の厩橋中学校に入学し、新たな教授法を学び教育免許状を得る。翌年、「狭山学校」を創立し、校長に就任する。

2. 主な業績

彼は手本を清書し、版木を彫り、製本した『いろはうた』や『往来物』『国尽・村名・名頭』『北野往来』などで教える。余興に書いた回文(上から読んでも下から読んでも同じの文)を多数創作、野々宮神社(狭山市北入曾 274-1)を「闇の軒 良き虫の音を 聞き惜しむ 聞きを音のしむ 清き野々宮」と詠んでいる。『地震解』『銭算盤』『等差級数』『筆算自摘要』『考益創業』『仮名遣明鏡』を編集する。その一つが『入間碑集』で、近郷近在の碑文を踏査し、収録したものを34巻にまとめる。遺墨は、現在も実家の本橋家に保存されている。

3. 特筆

安政2年(1855)から明治15年(1882)の24年間に学んだ子弟は「門弟三千人」と言う。近隣の有力者は北広堂の出身者で、その一人が入間郡藤沢村(入間市藤沢)出身の粕谷義三(1866～1930)である。同43年(1910)12月29日、泉山は88歳の天寿を全うした。



七曲井(北入曾)

参考・引用文献

『沢田泉山』所沢市小手指公民館 1971年

文責・権田恒夫